

【小学校・中学校・義務教育学校用】

## 令和7年度学校評価 結果・学校関係者評価

学校名	佐賀市立鍋島小学校	C : やや不十分である D : 不十分である
1 前年度 評価結果の概要	<p>・国語科において「読解力を高めるための授業づくりの工夫」として、児童一人一人の「めあて(問い合わせ)」を大切にした校内研究に取り組んだ。全職員の授業公開を通して、単元・授業づくりや言語環境の在り方を検討し、成果や課題を共有しながら研究を推進することができた。このことが、児童が主体的に学び、豊かに表現できる児童の高まりに結び付いた。</p> <p>・心の教育では、道徳の授業の充実、人権・同和教育、「心のカード」活用及びQ-Uの職員研修等について実践してきた。このことが、児童が楽しく安心して過ごせる学校・学級づくりに寄与している。いじめ事業や不登校対策については、担当者を中心に管理職とも連携しながら組織的に対応することができた。未然防止・早期発見・早期対応・再発防止の重要性について再認識ができたことや丁寧な保護者対応の在り方について周知できたことは大きな成果である。今後も、児童にとって安心安全な学校を目指していきたい。</p> <p>・業務改善・働き方改革については、各部会で業務内容を確認し見直しを持った業務遂行に心掛けたり、学年で共有する教材を使うなど改善に取り組んできた。時期によって差異はあるが、時間外在校時間が短くなっている業務改善の成果が表れてきている。今後も、各部の業務内容や学校・学年行事等について見直しを図り、改善を進めていきたい。</p>	
2 学校教育目標	<p>「笑顔いっぱい 楽しく学ぶ 鍋島っ子の育成」～つながりを大切に～</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・主体的に学習に取り組み、共に力を合わせて伸びる児童</li> <li>・思いやりの心をもち、自分も相手も大切にできる児童</li> <li>・規範意識や判断力を身につけ、正しい行動ができる児童</li> <li>・健康な体づくりに取り組み、粘り強くやり抜く児童</li> </ul>	
3 本年度の重点目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>① 校内研究を通して、主体的に学ぶ児童を育成する。</li> <li>② 鍋島スタイルや鍋島共通事項、UD教育等の取組を通じて、安全で安心な学校づくりを行う。</li> <li>③ 児童の良さを伸ばすことで自己肯定感を高め、規範意識や判断力を育成する。</li> </ol>	

重点取組内容・成果指標							中間評価		5 最終評価		主な担当者	
(1)共通評価項目							中間評価		最終評価			
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的な取組	進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言			
●学力の向上	○活用できる力の基礎となる基礎・基本の徹底	○「鍋島スタイル」(学習)が「できている」と回答する児童を85%以上にする。 ○市販テスト国語平均86点、算数平均83点以上にする。		A	・鍋島中校区の取組として「鍋島スタイル」(学習)の徹底と家庭学習時間を持続させる。しているが基礎を児童に提示し、その都度評価し、実践につなげる。 ・日々、児童の内容に合わせて授業を行い、定着の低い単元や内容を把握し、官能や授業改善に取り組む。	A	・「鍋島スタイル」(学習)ができるいると回答した児童は94.5%だったことに対し、職員アシートで鍋島スタイルを徹底しているか尋ねた回答では、肯定的な評価しているのは95.6%だった。今後も引き続き、学習の定着が図れるよう声掛けや指導を行っていく。 ・市販テストにて学年平均は、国語は87.8点、算数は83.6点であった。数値目標は達成しているが、引き続き校内研究を中心として理解しやすい授業づくりを目指し、進めていく。	A	・全国学力学習状況調査において、本校は県平均以上の結果であるということから、学力向上に力を入れて研究、実践を積み重ねていくことが分かる。校内研究と鍋島スタイルを中心に、継続した取り組みをお願いしたい。			
	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○自分や相手を大切にしている児童を90%以上にする。		A	・人と人のつながりを意識し、一人一人の存在を認め合う姿を育て、自己肯定感を高める。 ・人権・同和教育を教育課程に位置づけ、人権教室等の実施を通して人権感覚の豊かな心の育成を図る。	A	・「自分や友達を大切にしている」に対する肯定的回答した児童は97.8%で目標を達成することができた。人権・同和教育やふれあい道徳の授業実践を通して、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心が生まれている。 ・学校全体として、ふれあい遊びや活動を行い、授業では「友達タクミ」の中で友達に頼り切られたる時間を見せるなど、児童の豊がりを大目にした活動を通して自己肯定感を高めることに努めている。	A	・学校教育目標に掲げられている「つながりを大切に」の実現のために、児童が自分も相手も大切にした生活を送ることのできる指導を継続してほしい。そのためには、通信・メール・ホームページ等を活用して家庭・保護者への啓発も継続していくなければならない。			
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○「心のカード」の記述内容をふまえ、「いじめを見たり気づいたらしくら、止めないようにしたり大人に伝えたりしている。」安心して学校に通っていると回答する児童の割合を90%以上にする。		B	・児童用の「心のカード」を毎月実施し、担任が内容を確認する。問題事案があれば、即座に対応し、その後、教育相談担当と管理職を含めた組織的につかまり、継続的に見守る。また、不登校傾向の児童の背景や要因を職員で共有し、手立てを講じる。	A	・「いじめを見たり気づいたらしくら、止めようしたり大人に伝えたりしている。安心して学校に通っている」と回答した児童は86%で目標を達成することができた。数値目標を下回った。「安心して学校に通っている」と思っている児童は93%で目標を達成することができた。 ・児童の見守りについては、児童の心を大切にする指導を行っていると回答している。今後も、心のカードの取組を通じて、組織的に児童に関する体制づくり(児童と関わる取り扱い)を強化しながら、いじめの未然防止、早期発見、早期対応に努めていく必要がある。	A	・「いじめを見たり気づいたらしくら、止めようしたり大人に伝えたりしている。安心して学校に通っている」と回答した児童は86%で目標を達成することができた。数値目標を下回った。「安心して学校に通っている」と思っている児童は93%で目標を達成することができた。 ・児童の見守りについては、児童の心を大切にする指導を行っていると回答している。今後も、心のカードの取組を通じて、組織的に児童に関する体制づくり(児童と関わる取り扱い)を強化しながら、いじめの未然防止、早期発見、早期対応に努めていく必要がある。			
●心の教育	●○児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒85%以上 ●○将来の夢や目標を持っている間に肯定的な回答をした児童生徒85%以上		A	・毎月開く「心のカード」や、年に回ある教育相談時間での児童への対応では、気になる点だけではなく、児童の頑張りや学期目標に対する目標的な姿勢を認めているように話すする。 ・児童が喜んで了る学期目標を評価したり、書いた内容を交換したりして、児童が互いに認め合う場を設けることで、夢や目標を意識できるようにする。	A	・「年や学生全体として表示板や食事時間の配分などで持つている児童を認めようがいることで、「先生はあなたのよいところを認めてくれている」と思っている児童は87%と目標を達成することができた。 ・児童が喜んで了る学期目標を評価したり、書いた内容を交換したりして、児童が互いに認め合う場を設けることで、夢や目標を意識できるようにする。	A	・「年はあなたのよいところを認めていると思う」と回答した児童は87%、「将来の夢や目標を意識している」と回答した児童は85%と目標を達成することができた。 ・今年度は、職員会議で児童のWell-beingの実現に向けた取組について周知したり、各学年で学年始めから児童の夢や目標を設定するなどの取り組みで、児童の夢や目標を達成することができている。今後も、心のカードの取組を通じて、組織的に児童に関する体制づくり(児童と関わる取り扱い)を強化しながら、いじめの未然防止、早期発見、早期対応に努めていく必要がある。	A	・日頃から、先生方が児童の良さを認めて褒めることを意識した教育活動をなさっていることが伝わってくる。教育相談週間ににおいても、一人一人の児童に向き合って対応されている。Well-beingの実現に向けた取組は、次年度も継続してほしい。	
	○「鍋島スタイル(生活)」を中心に考え、きまりを守り、自分で正しい判断をし、行動できる児童の育成	○「鍋島スタイル(生活)」が「守れている」「大体守っている」と回答できるように目標をもたせる。また、全校児童で達成できている児童を90%以上にする。 ○鍋島スタイル満点カードで9割達成できた児童を85%以上にする。		A	・「鍋島スタイル」を掲示、放送するとともに、学級指導・児童会活動を通して開発的生徒指導を展開する。問題行動等の原因、背景をさぐり、未然防止に努め、生徒指導協議会で情報交換し、指導事務を共通理解し、全校に向けた指導していく。また、組織で早期解決、再発防止に努める。	A	・「鍋島スタイル(生活)」が「守っている」「大体守っている」と回答した児童の割合は、95%であった。また、鍋島スタイル満点通過において、9割以上達成できた児童の割合は、1回目と2回目を合わせて、90%であった。 ・児童の問題行動等については、生徒指導協議会等において、引き続き職員間での連携を図り、問題の早期発見、未然防止に努める。問題等の早期発見のために、全校放送等で呼び掛けるなどして、早期解決、再発防止に努める。	A	・「鍋島スタイル(生活)」が「守っている」「大体守っている」と回答した児童の割合は、95.7%であった。また、鍋島スタイル満点通過において、9割以上達成できた児童の割合は、1回目と2回目を合わせて、90%であった。 ・児童の問題行動等については、生徒指導協議会等において、引き続き職員間での連携を図り、問題の早期発見、未然防止に努める。問題等の早期発見のために、全校放送等で呼び掛けなどして、早期解決、再発防止に努める。	A	・あいさつよりも言葉遣いに関する課題があるという報告があった。児童同士がコミュニケーションをとる上で言葉遣いについては手立てを講じる必要がある。次年度に向けての取組案(「鍋島スタイル」の見直し)が提示されていたので、是非実現してほしい。	
	●運動習慣の改善や定着化	●生活リズムを整えさせ、日常的に運動に親しみ児童を育てる。「早寝早起き朝ごはんができる」と回答する児童を90%以上に ●「日常的に運動に親しみ、身体を動かすことが好き」と回答する児童を80%以上にする。		B	・養護教諭、体育部が主となって望ましい生活・運動習慣を身に付けさせる指導を系統的に行う。 ・状況に応じた感染症対策を行なうとともに、外遊びの奨励、大縦大会の実施、体育(保健)の授業の工夫改善を行う。運動の面白さ、楽しさ、喜びを味わわせ、運動に親しむ児童を育成する。	B	・保健室など日々の周知を行なってきたが、「早寝早起き朝ごはんができる」と回答した児童は92%であり、朝食を育てる意識がないと回答した児童は24%であり、前回より0.3%減少し目標に達成できていない。今後も児童や保護者によりい生活習慣を育むことの大切な周知・協力の態勢を継続していく必要がある。 ・日常生活の運動を意識し、身体を動かすことが好きだと回答した児童は74.5%であり、目標に達成している。今後も、外遊びの運動場所を広げ、児童の運動意欲を高め、運動に親しむ児童を育成する。	B	・保健室など日々の周知を行なってきたが、「早寝早起き朝ごはんができる」と回答した児童は92%であり、朝食を育てる意識がないと回答した児童は24%であり、前回より0.3%減少し目標に達成できていない。今後も児童や保護者によりい生活習慣を育むことの大切な周知・協力の態勢を継続していく必要がある。 ・日常生活の運動を意識し、身体を動かすことが好きだと回答した児童は74.5%であり、目標に達成している。今後も、外遊びの運動場所を広げ、児童の運動意欲を高め、運動に親しむ児童を育成する。	B	・学校で取り組まれていることは、基本的生活習慣を身に付けさせるために大切なことである。健康な体づくりについては、今後も継続した指導をしてほしい。各家庭との連携や周知も必要と思われるが、粘り強く取り組んでもらいたい。	
●健康・体づくり	●望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	●年間を通じて給食指導・食育を行い、食べ物を大切にする気持ちと望ましい食習慣、食べ方にいて学べる、「健康に良い食事をしている」と回答する児童を90%以上にする。		A	・栄養教諭と担任が連携し食育の充実を図る。年1回以上、授業において食に関する授業を発達段階や、児童の実態に応じて実施する。	A	・給食時間は決まりやマナーを守って食べていると答えた児童は97%、職員も食育の充実を図っていると答えた人は100%であった。給食時間の指導これまでも継続を行なっていくこと、「健康に良い食事をしている」の成果指標については、2学期以降の担任教諭と栄養教諭の食育の授業を通して評価する。	A	・給食時間は年生全体において「健康に良い食事をしている」と回答した児童は94.2%、学年評議会アートにて「給食時間は決まりやマナーを守って食べている」と回答した児童は95.6%と達成率は95.6%であった。 ・しかし、これらも含め食育の周知・指導を行なっている。 ・担任教諭と栄養教諭による給食の充実を行なっている。結果は3以上の評価が86%であった。家庭への周知に関する指導の充実を行なったと考える。	A	・食育については、今後も力を入れて指導してほしい。各家庭での指導も必要になってくると思う。学校から継続した食育に関する情報を発信し啓発してもらいたい。	
	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 ●年間20日の年次休暇のうち、職員1人当たりの年次休暇の取得日数14日以上		B	・毎週金曜日の定期退勤日、第三金曜日のスーパー定期退勤日を可视化し、取組に対して安全管理委員会等で全職員が認識し、達成を目指す。 ・安全管理委員会で、心身の健康のためにも積極的な年次休暇取得を周知する。また、長期休業中の研修計画を工夫し、連続した年次休暇取得を可能にする。	B	・年度最初から、定期退勤日と定期退勤時刻を周知してきていた。定期退勤日を意識し、時間外在校等時間月45時間以内であつた職員は全体で79.2%であった。 ・年次休暇取得については、9月末まで10日以上の取得率半は、57.4%であった。今後も、安全管理委員会を通して、心身の健康管理・職務遂行に関して、産業医の話を伝えたたりのリストを活用を推進したりしていく。	B	・時間外在校等時間月45時間以内であつた職員は全体で69.8%で目標達成できなかった。しかし、月毎の平均では昨年度より少し減少している。年休の取得についても、14日以上未だ多くは取得率より多く取得している職員が82.2%となつた。 ・年次休暇を周知したことや定期退勤日の意識化を図ってきたことが意識向上に結び付いていると考える。	B	・学校での働き改革が前進していることを知った。日の業務や1年間の業務等を見直すことでも、更に改革が進められると思う。この働き改革と児童・保護者対応を考えると難しい面もあると思うが、今後も粘り強く働き方改革を推進してほしい。	
	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	○業務の効率化の推進		A	・個人では業務のゴールと優先順位、組織としては、行事の精選と業務の縮減に取り組み、効率化が進んだという職員を80%にする。	A	・短期、中期、長期毎に業務の内容を見通した準備と計画を立て、各学年や部内や部外で可視化する。教育効果を優先に考え行事の削減、縮小を行なう。	A	・各部での取組を月1回の部会で業務内容に見通しを持つように工夫し、組織での対応が進んだことと、継め切り等の可視化をしたことが、業務改善の一助となつた。業務縮減を図ることができると感じる職員は89.1%であった。	A	・業務の効率化が進められ、先生方の業務改善の意識が高まっていると感じる。まだ課題が多いと思うが、今後は、地域や外部機関との連携も視野に入れ、学校の負担軽減できるような取組をしていく必要がある。	
●特別支援教育の充実	○教職員の特別支援教育のスキルアップと校内支援体制の確立	○支援を要する児童に適切な対応をとるよう努めている」と回答する教職員を90%以上にする。		A	・支援を必要としている児童に対して、必要に応じてケース会議を設定し、具体的な支援方法と短期・長期目標を決定する。 ・外部専門家との連携を密に行なうとともに、配慮・支援をする子どもに対する研修を実施する。	A	・「適切に対応している」と肯定的に回答する職員は93.3%であった。今後も必要に応じて随時ケース会議を実施し、支援体制の充実を図る。 ・外部専門家との連携、研修会を実施した。職員の指導力向上のための研修体制を充実していく。	A	・支援会議、外部との連携など随時行い、90%が配慮したと回答し、目標達成した。 ・児童の適切な実態把握、めあての設定、より有効な支援ができるよう、今後も職員の力量を高めていたための研修・研鑽を継続する。	A	・児童のための支援会議を開催され、特別支援学級、通常学級どちらにも対応できるよう丁寧な対応策が講じられている。新1生も含め、今後も児童の成長のために、幼保こ小の連携を強化していくってほしい。	
	(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目			重点取組								
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的な取組	進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	主な担当者		
○危機管理体制の強化と対応能力の育成	○家庭と連携した防災教育・安全教育の充実	○「災害が起きた時に自分の身を守ることができる」と回答する児童を95%以上にする。 ○自転車のヘルメット着用率を90%以上にする。	A	・年ははじめに避難の仕方や避難経路を伝え、職員の指導力向上を図るとともに、児童も朝夕で自転車の運転不器用の事故への対応を想像させる。各訓練は、実際に動きの確認をし、対応力を身に付けてさせる。 ・道踏み文化の一部改正(令和5年4月1日施行)により、全ての自転車利用者に対し、自転車用ヘルメット着用努力義務が課せられるこで、正しく乗り方についての指導内容等を各種便りで家庭に広める。	B	・避難訓練等、防災についての学習を通して、96.9%の児童が自分の身の守り方を知っていると回答している。 ・今後も、2学期以降の学習を経て防災意識を高めていく。 ・4月には交通安全教室を実施し、1年生は歩行実習、2年生~6年生は交通安全教育の動画視聴をし、安全な生活について学習した。 ・「できている」71%、「大体できている」13%、「自転車に乗っている」2%という結果となり、新規目標達成できなかった。 ・今後も自転車の着用の大切さを指導していく。 ・各指導内容の実行を長期休み前に家庭へ向けて配布し、安全教育について理解と協力を求めた。	B	・不審者対応避難訓練や地震火災避難訓練を通して、「災害時に自分の身を守ることができ」と回答した児童は97%であり、数値目標を達成することができた。今後も振り返し、防災意識を高めるための指導を継続していく。 ・自転車の乗車では、児童のヘルメットの着用率が96.9%という結果となり、新規目標達成できなかった。 ・児童に対する意識が向上していきる児童が多くいるが、今後も身を守るために安全な指導を継続していくなければならない。	B	・危機管理体制、児童の命を守るためにも計画的な訓練を継続して実施してほしい。自転車のヘルメット着用については、事故が起きたないよう、地域やPTAからも気付いた時には声掛けをするような働きかけをしていかたい。		
	○…県共通 ○…学校独自 ○…志と勝りを高める教育	・校内研究において、「算数科における授業づくりの工夫」を取り組んだ。見通しをもたせ、数学的な見方や考え方を働かせながら学ぶ「個別最適な学び」と「協働的な学び」を取り入れた学習活動に重点を置き、全職員の授業公開を通して、単元・授業づくりや学びの場の在り方を検討し、成果や課題を共有しながら研究を推進することができた。このことが、児童が主体的に対話的に学ぶ児童の育成に結び付いた。今後は、学習環境の充実を図るように計画をしている。 ・心の教育は、「心のカード」活用及びQ-Uの職員研修、道徳の授業の充実、人権・同和教育等について全職員の共通理解の下に実践してきた。このことが、児童が楽しく安心して過ごせる学校・学級づくりに生かされた。いじめ事案や不登校対策については、担当者を中心に管理職とも連携しながら組織的に対応することができた。しかし、事案の要因は主に「言葉遣い」であり、学校全体で継続して「言葉遣い」の改善の実践を行なっている。今後も、児童にとって安心安全な学校を目指していきたい。 ・業務改善・働き方改革については、学年で共有する教材を確認したり、各部会で業務内容について見通しを持った業務遂行に心掛けたりするなど改善に取り組んできた。時期によって差異はあるが、昨年度より時間外在校時間が減少しており業務改善の成果が少しづつ表れてきている。今後も、職員の意見も取り入れながら小さなことから業務や行事等の在り方について見直しを図り、改善を進めたい。	中間評価									
総合評価・次年度への展望												